



アーティスト「ヨシコ・タカヒロ」  
「吉田豊記念館」  
「まなざしについて」  
第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展

## 切り離された建築

現代の過密な社会における暮らしと建築の問題

過密な都市

ひきこもり

児童虐待

孤独死

### 現代の過密な社会における暮らしと建築の問題

「過密」な都市の中で起っている「ひきこもり」、「児童虐待」、「孤独死」は、実は建築と深い関係を持つ社会問題であり、ビエンナーレ開催趣旨である「今日、我々の生活空間における課題と、そこへの建築家の参加」に対する、日本からの応答にふさわしいものに思えた。深刻な問題であり解決は困難を極めるが、現代の日本を特徴づける「オタク」文化とも関係が深い、真摯に取り組むべき問題である。本ビエンナーレを通して、この問題をグローバルな視座へと投げかけることは、現代の日本において建築と周辺社会とを如何に「切る、つなぐ」かという建築的課題を考える上で好機と捉えている。

#### ■企画の背景 「切る、つなぐ」

建築とは、ひと続きの世界から一部を取り取り、独立した世界観を生み出す行為と言える。ただし、完全に切り離された空間は建築として成立し得ず「切る、つなぐ」の妙味の中で建築は成立している。

#### ■「つながり」を忘れ、「ひきこもり」、「児童虐待」、「孤独死」が問題化し始めた

縁側や引戸、暖簾が象徴するように、日本の建築は内外を微妙に「つなぐ」ことを得意としてきた。ところが近年、日本人の住まいの多くは、ドア一つで「切り離された」形式へと移行した。同時に、我々は近隣から気配を読み取ることが出来なくなり、無関心となり、これまで発生していたであろう「ひきこもり」、「児童虐待」、「孤独死」等を、社会の「問題」へと変質させてしまった。

#### ■魅力である「過密」さが、問題へと変質され始めた

住まいの中の現象が「問題視」される過程に並行して、住まいを取り巻く都市においても、本来はその魅力であるはずの「過剰」さが、「過密」という社会的な問題へと変質し始めている。

#### ■「生」や「死」は、住まいで営まれる生活の一部であった

かつて生や死は生活の一部であり、住まいの中にあった。それがいつの間にか、病院といった特定の建築の中で営まれることが当たり前になってしまい、葬儀や通夜といった儀式も今や住まいの中から排除されつつある。現在でも多くの人が「自宅での大往生」を望んでいるわけであり、その意味では孤独死は必ずしも悲惨なものとは言えない。問題は、住まいの閉鎖性ゆえに、その発見が死後大きく遅れることにある。ひきこもりや児童虐待にも、類似した状況が読み取れる。

#### ■問題と課題解決を建築的な視点から考える

「過密な都市」と住まいが切り離された状況が生み出した「ひきこもり」、「児童虐待」、「孤独死」といった社会的問題を扱う表現者四名を招聘する。そこにキュレーションの一環として建築的な仕掛けを展示空間に持ち込むことで、これらの問題が建築の原点ともいえる「切る、つなぐ」に極めて密接した「我々の生活空間における課題」であることを問い合わせ、そこへの建築家の参加を呼び掛けるための展示を企画した。

## 4人の表現者とその作品について

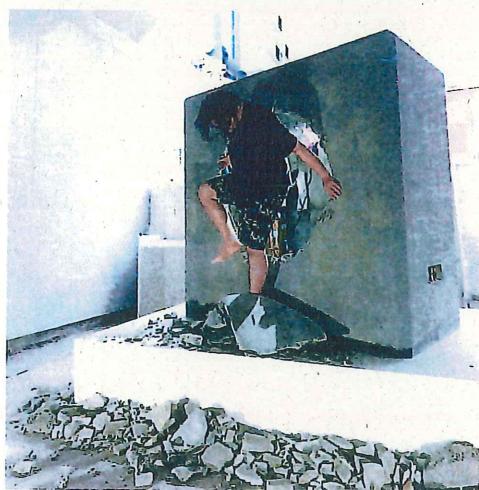


西野壯平 写真家 「過密な都市における過剰な美学と無関心な視点」  
にしのそうへい

作家について：都市の過密をテーマに、数万枚の写真をアナログ手法で合成したコラージュを制作している写真家。

展示作品：東京を一人歩きモノクロフィルムで撮影した数万点の写真すべてを、約4か月かけてアトリエに一人籠り、一枚一枚手作業でコラージュする手法で制作された平面作品。

選定理由：閉じられた個室の中で記憶を頼りに再構成される過密な都市のビジュアルは、本企画のテーマである過剰の美学の過密な問題点への変質を的確に表現している。アトリエに一人籠り、4か月もの間写真を手作業でコラージュするという孤独な作業は、閉じた住まいの中で記憶の中に生じる過剰や過密が抱える社会的な問題に対して、外側からの視点で逆説的に発信する、極めて建築的問題意識をもったものである。都市と住まいにおける「切る、つなぐ」そして他3名の作家が問題提起する室内側での出来事に対し、外側からの視点を表現し、展示全体への導入の役割を担う。

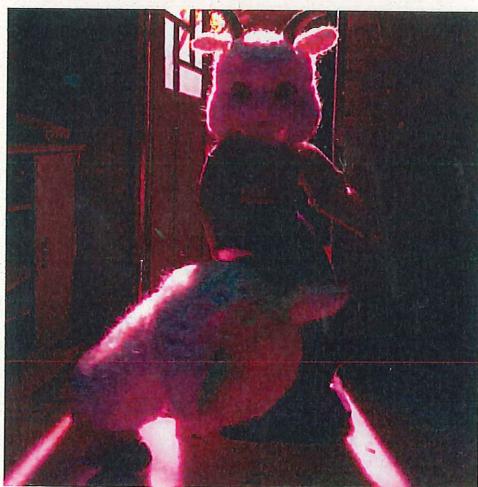


渡辺篤 現代美術家 「ひきこもりにおける当事者性と他者性、共感がもつ可能性と不可能性」  
わたなべあつし

作家について：自身のひきこもりの体験を手掛かりとして、タブーとして扱われがちな諸問題をテーマに、批評的な立体、平面作品を発表している美術家。

展示作品：ひきこもりの当事者により撮影された自室と外側との隔たりを、写真と渡辺自身の手によるオブジェで構成するインスタレーション。

選定理由：今や不可視の社会問題となり、また自身も元当事者であった「ひきこもり」の経験をもとにこの社会問題に対してアートを介入することで、その解決に向けて直接的な可能性を追求している渡辺の姿勢は、建築と共通するものを感じる。心の傷を持った人々と協働し、インターネットを介したプロジェクトを多数実施してきたその取り組みは、社会、文化、心理、福祉にもおよぶものであり、建築の領域と重なる。またそれらの取り組みは、いずれも当事者性と他者性、共感が持つ可能性と不可能性について考えさせられるきっかけになると考えた。



見里朝希 アニメーション作家 「1枚のドアの内側で起こる児童虐待と過干渉の狂気」  
みさとともき

作家について：児童虐待をテーマとした大学院修了制作のパペットアニメ作品が国内外で話題沸騰中のアニメーション作家。

展示作品：児童虐待という社会的問題を、フェルト人形を使った「マイリトルゴート」という一見ソフトなパペットアニメという表現を取りつつ、実は辛辣に問いかける映像作品。

選定理由：グリム童話「オオカミと7匹の子ヤギ」を題材にした話題作「マイリトルゴート」は、見里が大学院の修了制作として、1年がかりで完成させたフェルト人形アニメーション作品。可愛らしいキャラクターを用いてながら、児童虐待や子どもへの過干渉などの社会問題に一石を投ずる同作中には、室内外を隔てているものは1枚のドアであることが暗示的に表現されており、社会問題が建築と密接に結びついていることを示すもので、本展示企画に極めて即したものと考えた。



小島美羽 遺品整理人・模型作家「閉鎖的な部屋が発見を遅らせ事件化させる孤独死」  
こじまみう

作家について：孤独死などの遺品整理の仕事の傍らで、孤独死の現場をミニチュア模型で制作し、その現代的な意味を問いかけている作家。

展示作品：孤独死の現場における住まい手の死に至るまでの日常をリアルに再現したミニチュア模型。現代の日本の若手建築家のジオラマ調の模型表現との類似性も重視。

選定理由：父の突然死をきっかけに始めた遺品整理の仕事であるが、孤独死の現場は月に5回ほどもあるという。孤独死の現場を再現したミニチュア模型の制作を始めたのは、平和と思われている日本にもこのような現実があることを知ってもらいたいという思いから。孤独死そのものが問題ではなく発見までかかる時間が凄惨な事件としてしまっているとも述べており、孤独死がコミュニティーがなくなった社会問題や隣人の気配が感じられない現代の都市の住居における建築的問題によることを示唆すると考えた。



## 会場構成について

- ・日本館二階の展示空間の4つのコーナーに、表現メディアが異なる表現者4名の作品を展示する。
- ・展示空間の中心にはやや広めの空間を用意し、4つの展示へとアクセスするホワイエとして用いる。
- ・ホワイエの中央部の床にあるピロティにつながる開口部を利用して、この後に説明する「グリッド」を象徴的に1つだけ、ピロティレベルに配置しておく。  
ピロティからは、展示の基本ユニットが見え、日本の住まいでの暮らしを連想させることにより、日本館前を通過する来場者に内部での展示を予感させる。ホワイエからはグリッドを天井から見下ろす視点を提供することになる。
- ・それを取り囲む4つのコーナーは、天井から吊り下げた紗幕により、グリッド状に区切る。紗幕は暖簾状にめくることで、次のグリッドへと容易に移動できる仕組みになっている。
- ・紗幕で仕切られていることにより、来場者は4人の表現者の展示物と展示空間を1人で体験することになり、住まいの中に1人でいる状況を疑似的に体験することになる。
- ・過密な都市、ひきこもり、児童虐待、孤独死をテーマとした作品を来場者が孤独な状況で向き合う状況を生み出すことで、通常の美術館における同種の展示物の閲覧とは異なる、建築のビエンナーレならではの展示を生み出す事を意図している。
- ・紗幕は透過性を持つため、グリッドの奥に展示された作品を曖昧にする。紗幕には、作品のメッセージを投影し、紗幕を進むたびに作品が徐々に明確に見え、作品への理解が進む形式としている。
- ・これにより、比較的個性の強い作品をどこまで近づいて見るかは来場者に委ねられる。同時に来場者は建築の「切る、つなぐ」の意味を、作品へのアクセスと言うアクティビティの中で身体的に体験し、想いを巡らすことを意図している。





### 過密な都市の無関心な視点と、社会から切り離された孤独を疑似体験する

4つのコーナーに展示される4人の作家の作品は、展示空間中央のホワイエからは多重に重なる紗幕によりぼやけて見える。来場者は関心をもつ作品をより鮮明に観るために、紗幕をくぐりながら先に進む必要があるが、この選択自体が過密な都市における無関心な視点を考えるきっかけとなる。また紗幕に囲まれた空間の中で1人で作品と対峙することで、作品が問題提起する「孤独」を疑似体験することになる。



### 展示空間へ誘導するトリガー



展示室とピロティの間の開口を活かして畳二畳ほどの部屋をぶら下げる。1枚のドアは、会場を行き交う人々を立ち止まらせ内部へと誘う。部屋の中に散りばめられた、日本の過密な都市の中で起こる社会問題を暗示するワードと、頭上から感じる人々の視線は来場者の想像力をかきたて、上部の展示空間へと導く。

### 見る・見られるの反転



### れるの反転

展示空間から見下ろせるピロティに置かれた部屋は、展示が社会から切り離された部屋の中で起こる建築的問題でもあることを理解させるトリガーとなる。また、部屋に対してドアの外側を都市と見立てることで、ドアを開け閉めをする人々の様子を、過密な都市における無関心な視点と重ねて見ることもできる。

### 各作家との一对一の対話



### 会場の空気感を



各作家とはキュレーターが個別の対話により展示の方向性を詰め作家全員での調整は行わない。各々が取り扱う孤独にまつわる社会問題を極力ピュアに見せることと、予定調和ではなく緊張感のある展示空間を期待するためである。各作品が孤独な制作環境の中で生まれる点も孤独がもつ可能性として取り上げたい。

### 綴じたカタログ

カタログには紗幕と同素材を重ね、会場構成の意図と展示会場の空気感を伝えるものとする。

予算 内訳	出展作品輸送費	200万円
	関係者旅費	500万円
	カタログ作成費	350万円
	保険料	100万円
	謝金	150万円
	広報費	200万円
	展示施工費	1,000万円
	現地管理運営費	1,500万円